

中觀莊嚴論の識論批判

小山 一行

寂護の『中觀莊嚴論』は、その第一偈に、

『自と他の説く諸法は、実には一と多の自性を離れているから、無自性であつて影像の如し』

と説かれることによつて知られる如く、自性を認めようとするあらゆる謬見を「無自性」の立場から破することを趣旨としたものであるが、今本頌九十七偈を従来の説に従つて二分するとき、前半六十二偈は第十五偈までが外境について自性が成立しないことを述べたものであり、十六偈から後がいわゆる識に関する論争に充てられている。寂護の識論については、古来有相説か無相説かとの意見が提出され、最近では中瑜観伽行派として独自の立場を持つていたことが解明されているが、ここでは本頌第十六偈以後の所説を検討することによつて、寂護の思想的立場を確認したいと思う。

先ず論者は、識に関する立場として、二であるとする立場と二でないとする立場があると述べ、

『この中、二であるとの理趣は、所取と能取の二が正しくあると説

き、識は水昌の如く対境 (yu) の行相 (nram pa) を執ることなしと説く』

とし、これが無相の識 (nram pa med pa'i nram par ses pa) であるとする。この無相の識に対する論破として、論者は識の自証 (odag hid ses pa) という立場を述べる。即ち、識は対象の物質的性質 (ben po'i no bo) とは異つて生ずるのであつて、対境の顕現と和合することはない。識は識自身を知るのみであり、対象を領受することはない。こうした自証の概念は次のように定義される。

『識は自己自身を知るが故に、青等の如く他の知者に依存しないのであり、知られないものは存しないという義を自証と名付く』

しかし、識が識自身を知るといふ性質は、決して識の中に所作と能作との分化を許すものではない。かかる意味においては識は一である。そのことは、

『識は（無分で一なる性質（なのだからそこ）に（知るものと知られるものと知ることという）三つの性質はない。その故に（こ

こでいう) 自証は所作と能作との存在としてあるのではない⁽⁷⁾

と説かれる。かくして、『他に依存せず自を明かす性質を識

の自証というのである。この故に、識はこうした識自身の性

質によつて自己を知る。他の対象の自性はどうして知るか。

たとえば自体を照らす働きがあるから自己を照らす作用を

「照明」という。このように識もまた識自身を領受する性質

があるから自証と説くのだ⁽⁸⁾』というのである。

さて、このような立場は、無相説の反論として考えられる

有相説についてもまた同様にそれを否定する根拠となる。

『識が行相を俱有するという説については、(識と対象の) 二は真

には異なるものであるが、対象と影像は類似するからただ仮に知る

ということがある』⁽⁹⁾

これはつまり、識の中に対象の果たる影像が行相としてあ

らわれ、それを領受することによつてあたかも対象があるか

のように領受せられることを述べたものであるが、それはあ

くまでも施設 (śāṅgś pa) であつて、真実に識の中に対象の

行相があることを認めるものではない。なぜなら、影像とは

真実にはないのだから、それを因として述べられた対象の感

受もまた真実ではないことになる。そして識の中に行

相がありえないということは、識の無分性、一体性という観

点から述べられる。

『対象によつて識の中に行相が確立せられるとすれば、識において

一であることが説かれない。(従つて) そこにおいて外境を知るよ
うな(識の) 行相というものもない』⁽¹⁰⁾

つまり、多なる対象が識の行相によつて生ずるとすれば、識も

又多であることとなり、識が一であつて行相が多であるというな

らば、その行相は識自身とは異なるものとなつてしまう』⁽¹¹⁾

かくして、有相の識説を否定する際にも、識は能所を離れ

て無分であるとする自証の立場が論拠となつていることが知

られる。

以上のような寂護の批判は、有部と經量部とを対論として

行なわれたものであることが既に知られているが、これは

Tattvasaṅgraha の外境批判において述べられた主張と全く

軌を一にするものであり、それは有相・無相という二つの識

説を、識の自証ということを論拠として共に否定したのであ

つた⁽¹²⁾。しかし、Tattvasaṅgraha においては、それが外境を

知ることの可能性について論ぜられたことにとどまるのに対

して、本論においては、その目的はあくまでも第一偈に示さ

れる無自性を述べることにあるのであるから、ここではさら

に無分なる自証としてであると述べた識自身が、究極的には無

自性であることに論及する。それが第四十四偈から第六十偈

に至る唯識説への論難である。

論者は先ず、唯識説とは

『無始以来(識の中に) 相續してきたものが薰習成熟して変化し、

諸の行相として顯現する⁽¹⁵⁾』

とする立場であると述べ、それについて有相と無相との二つの立場を想定する。しかしながら、先に述べた有部と經量部との識論についての有相・無相の批判は識と対象とに関するものであるのに対し、ここで問題とされるのは識と行相との関係である。即ち、有相唯識とは、識の薰習によつて生じた行相が識の中に俱有せられて実在するとする立場であるが、これについては、識の単一性と行相の複數性の矛盾という、先に述べたと同様の批判が述べられる。

『もし、眞實識が多なる(行相)を成ずるならば、それらは一を成ずることに反するのだから、(識も又)決定して各別なることと成る⁽¹⁶⁾』

『行相の異なることがないならば、動と不動等は一によつて一切が動くこととなり、過誤に陥つて返答し難し⁽¹⁷⁾』

次に無相唯識とは、

『また次に、この自性においては、これらの行相はない。まさしく無相なる識によつて錯つて顯現するのだ⁽¹⁸⁾』

とする立場であるが、これについては(一)行相が実在しないならば眼前に明らかに対境を感受するのはどうか⁽¹⁹⁾。(二)唯識家のいう識とは、行相を感受する働きをいうのであるから、行相を離れた識そのものというものはありえない⁽²⁰⁾。という二つの批判を述べる。

また、行相と識とを因果関係として考えると、(三)行相は虚妄であるとしても識より生じたものであるかぎり無因とはいえない。識が因であり行相がその果であるとするならば、因たる識が実在で、果たる行相が実在でないとはいえない⁽²¹⁾、という批判が成立する。即ち識と行相は、互に依他起(saṃbhāra)であると考えるときはじめて眼前に対象を感受するという認識の事実が説明できるのであつて、こうした事実を識と行相との二者に分離すれば、結局矛盾に陥る外はない。かくして、行相が虚妄であるように識もまた独立した自性を持つものではあり得ない。無分なる一者としての識に自性がなければ、多なる行相にも対象にも自性はない。前半の總結として述べられる

『何であれ一なることがないところ、そこには多なることもない』⁽²²⁾
 という立場は、本論の所説が第一偈の「離一多性」の論理によつて統一せられていることを明瞭に示している⁽²³⁾。

このように見てくれば、『中觀莊嚴論』の寂護の立場は、識は識自らを知る働きとして刹那に生滅しつつあるのみであつて、そこには対象を知る働きも、又、識自身を能所に分化する働きもない、として識の無分性一体性を主張しながらも、それは認識の事実を対象や行相や識とに分化することの誤ちを排したのであることが知られる。竜樹以来の中觀の究極的境界は、こうした事実の場の中から概念を抽象化することを

極度に戒めたのであり、寂護も又認識という事実を説明するために、行相と識との関係を説く唯識説を採用するとしても、それはあくまでも施設であり、唯影像の如きを見て愚人が対象ありと見、またその対象を知る識ありとするのであるから、勝義においては、即ち証得の境たる般若においては、こうした識もまた無自性であることを注意深く述べているのである。このような態度の展開は、寂護の二諦に対する態度と照らし合わせて理解するときより一層明瞭になるであろうし、又、中観派の実践道に対する態度についてもさらに検討を要するであろう。

註

- 1 本論の構成については“A Synopsis of the Madhyamakālamkāra of Śāntarakṣita” Masamichi Ichigo (印仏研二〇—二) 参照
- 2 山口益博士『般若思想史』一七四頁、中村元博士『インド思想史』二一〇頁等。
- 3 梶山雄一博士『仏教における瞑想と哲学』(哲学研究五一二)
- 4 Madhyamakālamkāra vṛtti 東京 Sa 56b
- 5 Madhyamakālamkāra kārikā 16
- 6 M. v. Sa 56b, Tattvasaṃgraha kārikā 2012
- 7 M. k. 17
- 8 M. v. Sa 57a 等線部 M. k. 18
- 9 M. k. 20

- 10 ibid. 22
- 11 M. v. Sa 58a
- 12 梶山博士前掲論文、一郷正道氏『中観莊嚴論の和訳研究(1)』(京都産業大学論集二二二、一九七二)
- 13 Tattvasaṃgraha の識論については菅沼晃博士『寂護の識論』(東洋大学紀要一八文学部編)に詳しい。
- 14 M. k. 44
- 15 ibid. 46
- 16 ibid. 47
- 17 ibid. 52
- 18 ibid. 53a
- 19 ibid. 53b
- 20 ibid. 58
- 21 ibid. 61b
- 22 中観派の「離一多性」の論理については、江島恵教氏『離一多性』による無自性性論証』(宗教研究四八一)等を参照
- 23 寂護の二諦説については上山大俊氏『シャーインタラクシタの二諦説』(印仏研九—二)がある。